

ガラスプラント業界トップを目指し 大手製薬会社の"お膝元"狙って進出

株式会社旭製作所

理化学ガラスメーカーの旭製作所は世界の化学・製薬メーカーと取引があり、先進化学製品や薬品の研究・生産を担う。大手製薬メーカーお膝元のスイス、米国、英国のガラスメーカー買収を機に、世界市場でのさらなる販売拡大を期す。

世界の化学・製薬メーカーに納入 独自技術で生産効率の向上に寄与

「M&Aやジョイントベンチャーを進めながら、2024年9月期までにガラスプラント業界で世界トップを目指します。理化学ガラスメーカー・旭製作所の池田靖之代表取締役社長は力強くこう目標を語る。

同社は化学メーカーや製薬メーカーが研究や開発、生産の際に反応・合成・濃縮・蒸留などを行うためのガラス製容器を設計・製造する。濃縮に使うエバポレーターのフラスコ容量は世界最大の200Lまで製造するなど、高いガラス加工技術力が強みだ。本社のある熊本県内など国内に5カ所、海外に5カ所に生産拠点を構え、国内の化学メーカー上位10社、世界の製薬メーカー上位20社などと取引がある。これまでに計102カ国に納入した実績を持ち、世界中で多くの先進化学製品や薬品の研究・

生産を担っている。

創業は1950年。大手化学メーカーのガラス加工職人だった池田社長の祖父・豊氏が独立し、フラスコ、ビーカーなど実験用の小さなガラス器具の製造を始めた。その後、高度成長期に石油化学業界が伸びるのに対応し、容量の大きなガラスプラント事業を拡大してきた。顧客企業の求める仕様で特注品を作っていたが、2010年代以降に規格化した手頃な価格のパッケージ製品を投入し、大きく成長を遂げた。現在は化学工学・機械設計・電装設計など設計開発部隊約35人とガラス製造部隊約95人が連携しながら、顧客企業の高度なニーズに応えるガラスプラントを設計・製造する。

主力製品は国内最多の出荷量を誇る反応装置だ。化学反応などを起こす際に使う装置で反応容器、コンデンサー、滴下ポートなどで構成する。容量300mLから100Lまでラインナップが豊富で様々な物質の反応に対応できる。装置の核となり性能を左右する反応容器は「他社は真似できない」（池田社長）という独特の形状を実現している。容器を囲むジャケット部分をリング状の細かな部屋に分けた「媒体バッフル付き」と称する構造にしているのだ。その上をさらに真空ジャケットで覆い三重構造とした製品もある。容器内の温度を素早く、また緻密に制御し反応時の収率や生産効率の向上に寄与できる構造だ。

「当社は創業以来、業績が良くない時期も機械・設備を導入し、人材を採用・育成するなどコツコツと本業への投資を続けてきました。加工に使う旋盤など自社設計の機械・設備もあります。地道に技術の確立と継承に努めてきた積み重ねがあるからこそ、媒体バッフル付きのような複雑な製品を生み出し製造し続けることが可能です」と池田社長は説明する。

海外のガラスメーカーを買収 日本製の“心臓部”と現地生産品を融合

旭製作所が海外に進出したのは2004年。池田社長が「旭製作所の技術を世界で試したい」と海外事業部を新設し、インド、中国、韓国などアジア市場でガラスプラント

の売り込みを図った。しかし、「価格競争に勝てず、連戦連敗でした」（池田社長）。そこで2008年、インドに合併会社ATR ASAHI Glass Process Systems Pvt.Ltd.を立ち上げ、反応容器のような“心臓部”のみを日本で作り、それ以外の部品を現地で作る「ハイブリッドシステム」を構築する。この策が成功し、事業は軌道に乗った。

2014年にはスイス老舗ガラス加工メーカーGlasKeller Basel AGを買収した。「ガラス業界は狭く主要企業の経営者はお互いに顔見知りです。GlasKellerのオーナーと一緒に食事をした際、たまたま『そろそろ引退したいが後継者がいない』という話を聞き、ご縁があってグループ入りしていただくことになりました」（池田社長）。偶然とはいえ、この買収は旭製作所の海外事業において大きな意味を持つものとなった。

「世界の上位製薬メーカーの本社がある国・地域に生産販売拠点を設ける」という海外戦略を練っていた中で、ノバルティス、ロシュと製薬メーカートップ2社の本社があるスイス・バーゼルに拠点を構えることができたからだ。

上位製薬メーカーのお膝元に拠点を構える戦略は池田社長の海外営業経験がベースにある。「大手製薬メーカーがアジアに置く研究所や生産拠点に売り込みに行きましたが、現地では性能や品質に関係なく本社の指示で本社工場と同じガラスプラントを採用するケースが多く、悔しい思いをしました。その時に、各製薬メーカーの本社へ売り込み納入実績をつくるのが、より多くの製品を採用いただくポイントだと気づいたので。本社近くに拠点を据えれば、現地の規格を踏まえた生産・販売がしやすく、製品納入後も修理や改造などのニーズにきめ細かく対応できます。長く安心して使いたい製薬メーカーからの信頼も得られると考えました」。この戦略の下、旭製作所は2019年には米国のH. S. Martin、イギリスのCambridge Glassblowingとガラスメーカーを続けて買収し、ハイブリッドシステムによる販売拡大を図っている。

さらに今、旭製作所は2025年までに「バーチャルワンファクトリー」を構築しようと動く。世界の製造拠点が自律的に活動しつつ、需要のアンマッチが発生した場合には1つの工場のようにそれぞれの生産能力を有効活用する仕組みで、納期が間に合わないことによる販売の機会損失を抑えるのが狙いだ。

旭製作所は2020年3月、H. S.Martin買収資金の調達のため、JBICと肥後銀行との協調融資を利用した。



英国 Asahi Glassplant UK Ltd. 外観



英国 Asahi Glassplant UK Ltd. 内観



米国 AGI North America, Inc. 内観



スイス GlasKeller Basel AG 外観

2021年には理化学ガラス製品・装置の製造・販売に必要な資金として、JBICと民間金融機関の協調融資で米国、スイス、イギリスの現地法人と、それぞれ貸付契約を締結した。「肥後銀行からご紹介を受けて海外案件に豊富な経験とノウハウを持つJBICとのお取引が始まりました。2021年には現地法人に対する直接融資をしていただき、各社の管理意識向上にも大いに役立ちました。今後も海外事業拡大にぜひ利用したいと思います。先進国向けのプランが充実すると、より機会が増える」と期待しています」と池田豊治取締役は話す。

旭製作所は今後も自社が誇る世界トップクラスのガラス加工技術とグループ企業の強みを融合し、魅力的な製品を、魅力的な仕様・価格で、魅力的なタイミングで世界中の顧客に届ける体制づくりにまい進する考え。「本日も海外法人も高い専門性を持ち、各社が強みを生かしながらともに成長する『トランスナショナル企業』として世界市場で勝負していきます」と池田社長は意気込む。

株式会社旭製作所

本社所在地	熊本県荒尾市高浜1978
URL	https://www.theglassplant.com/
設立	昭和25年4月(有限会社 旭製作所)
資本金	1億円
売上高	75.9億円(2021年9月期)
代表取締役社長	池田 靖之
従業員	旭製作所270名 (AGIグループ国内約700人/海外約200人)
事業内容	理化学用ガラス製品の製造販売、石英ガラス製品の製造販売、装置レンタル、ガラスプラント設計製作・メンテナンス

本件に関するプレスリリース

<https://www.jbic.go.jp/ja/information/press/press-2021/1117-015452.html>



池田 靖之 代表取締役社長